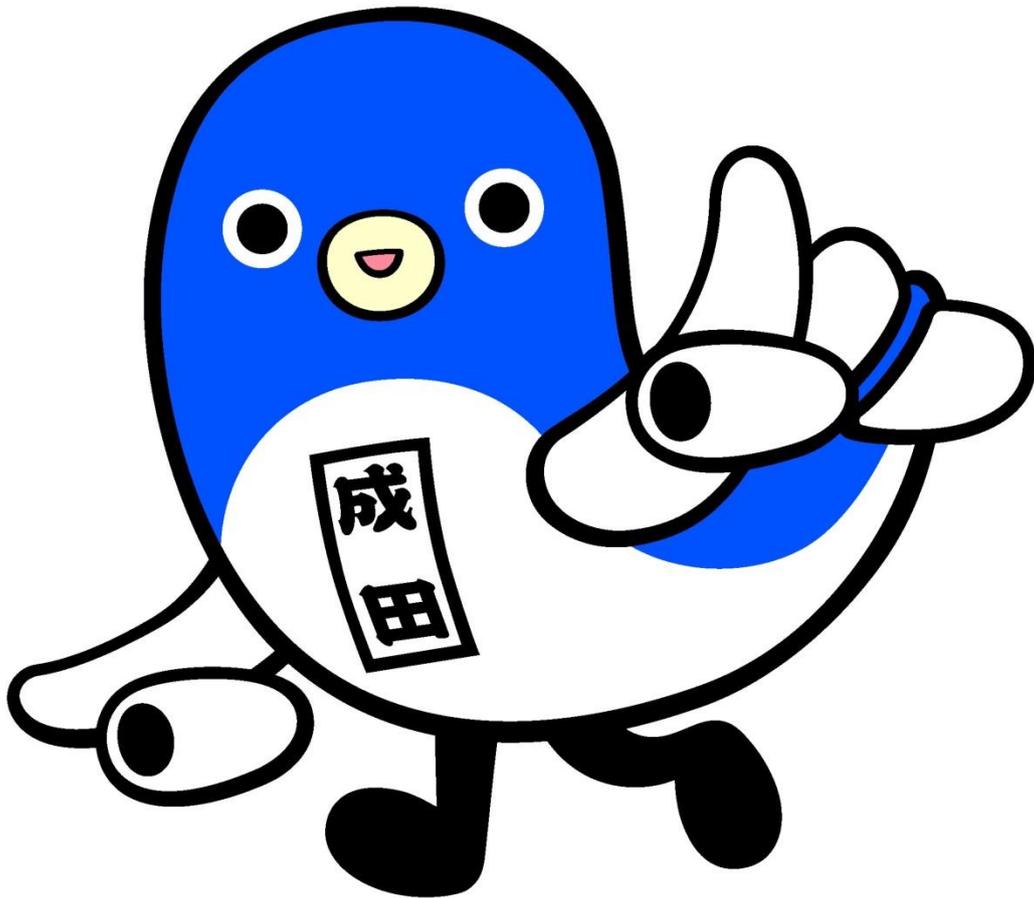


令和6年度

全国学力・学習状況調査の結果の概要



成田市教育委員会

教育指導課

# 令和6年度全国学力・学習状況調査

## 目次

1	調査の概要	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	1
	(1) 全校学力・学習状況調査の目的	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	1
	(2) 令和6年度全国学力・学習状況調査の実施について	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	1
	① 実施時期	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	
	② 対象学年及び実施した児童・生徒数	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	
	③ 調査事項及び手法	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	
2	小学校の調査結果	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	2
	(1) 教科に関する調査	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	2
	領域・回答種別比較・正答数分布グラフ	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	2
	問題別傾向	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	3
	(2) 児童質問の全国・経年比較	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	4
	(3) 児童質問と回答率とのクロス集計分析	...	...	.....	.....	.....	.....	.....	5
	(4) 学校運営における質問の全国・経年比較	...	...	.....	.....	.....	.....	.....	6
3	中学校の調査結果	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	7
	(1) 教科に関する調査	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	7
	領域・回答種別比較・正答数分布グラフ	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	7
	問題別傾向	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	8
	(2) 生徒質問の全国・経年比較	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	9
	(3) 生徒質問と回答率とのクロス集計分析	...	...	.....	.....	.....	.....	.....	10
	(4) 学校運営における質問の全国との比較	...	...	.....	.....	.....	.....	.....	11

# I 調査の概要

## (1) 全国学力・学習状況調査の目的

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・学校における個々の児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善・充実等に役立てる。
- ・以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## (2) 令和6年度全国学力・学習状況調査の実施について

①実施時期 令和6年4月18日(木)

②対象学年及び実施した児童・生徒数(成田市)

- ・小学校第6学年、義務教育学校前期課程6学年…1, 160名
- ・中学校第3学年、義務教育学校後期課程3学年…1, 135名

③調査事項及び手法

ア 児童生徒に対する調査

(ア) 教科に関する調査

- ・学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題を出題
- ・各大問において「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージを発信
- ⑦小学校調査では、国語、算数についてそれぞれ45分で実施
- ⑧中学校調査では、国語、数学についてそれぞれ50分で実施

(イ) 質問調査

- ・学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問調査を実施

イ 学校に対する質問調査

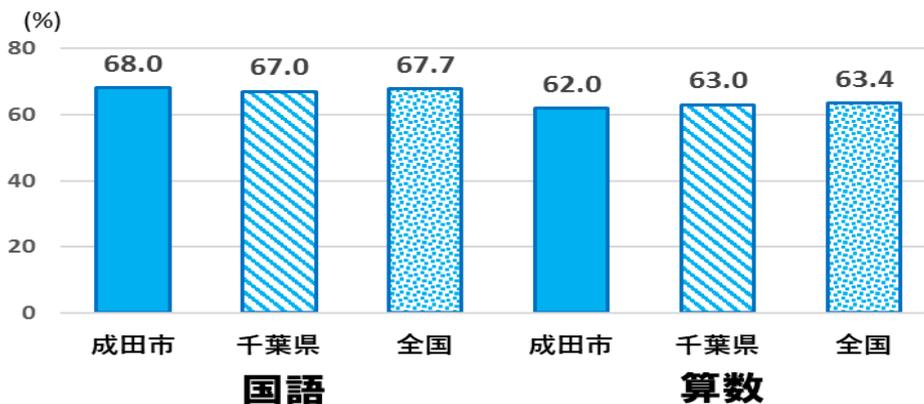
- ・指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する質問調査を実施

ウ 今年度の調査の特徴

- ・児童生徒質問調査について、全面的にオンラインによる回答方式で実施

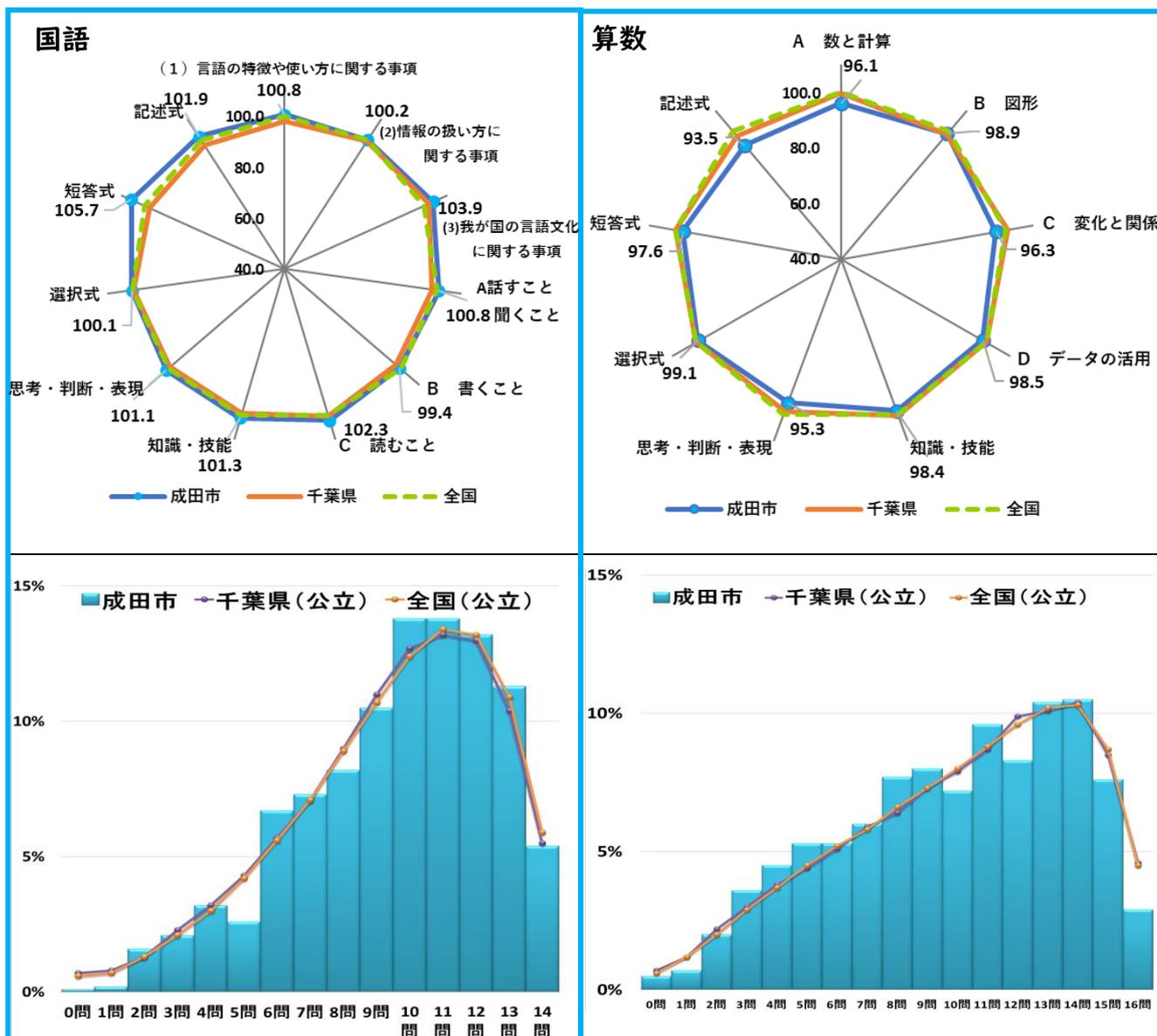
## 2 小学校の調査結果

### (1) 教科に関する調査 【全国・千葉県との比較】(平均正答率)



### ◆領域・回答種別比較 下段は正答数分布グラフ(横軸:正答数 縦軸:児童の割合)

※レーダーチャートは全国平均正答率を100としたときの相対値を表す

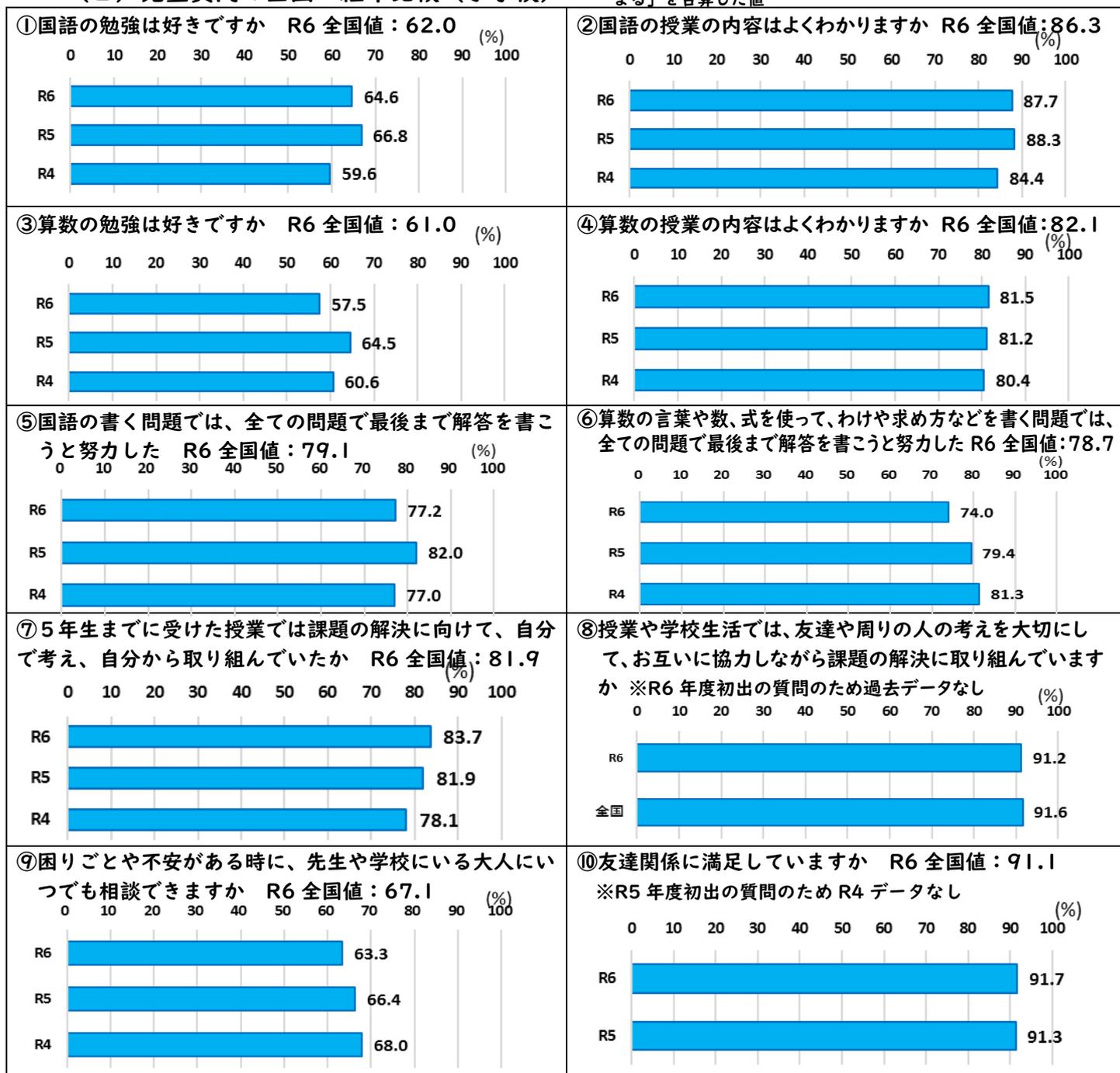


◆問題別傾向 正答率が高かった設問 低かった設問

国 語																	
<p>人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。(「読むこと」)</p> <table border="1"> <tr><th>地域</th><th>正答率 (%)</th></tr> <tr><td>成田市</td><td>76.2</td></tr> <tr><td>千葉県</td><td>71.8</td></tr> <tr><td>全国</td><td>72.6</td></tr> </table>	地域	正答率 (%)	成田市	76.2	千葉県	71.8	全国	72.6	<p>目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。(「書くこと」)</p> <table border="1"> <tr><th>地域</th><th>正答率 (%)</th></tr> <tr><td>成田市</td><td>55.4</td></tr> <tr><td>千葉県</td><td>54.4</td></tr> <tr><td>全国</td><td>56.6</td></tr> </table>	地域	正答率 (%)	成田市	55.4	千葉県	54.4	全国	56.6
地域	正答率 (%)																
成田市	76.2																
千葉県	71.8																
全国	72.6																
地域	正答率 (%)																
成田市	55.4																
千葉県	54.4																
全国	56.6																
<p>全体の7割の問題の正答率が全国平均と同等または上回っており、中でも「読むこと」の領域で良好な結果が得られた。一方で、「書くこと」の領域は全国平均よりも下回った。書く目的や意図を捉え、取材で得られた「事実」と、自分の「意見」とを区別して記述することに課題が見られた。同じ「記述式」の問題でも、物語を読み、心に残ったところや理由を記述することは高い正答率であった。無解答率は全国・県平均より全体的に低い結果であった。</p>																	
算 数																	
<p>直径の長さ、円周の長さ、円周率の関係について理解している。(「図形」)</p> <table border="1"> <tr><th>地域</th><th>正答率 (%)</th></tr> <tr><td>成田市</td><td>73.2</td></tr> <tr><td>千葉県</td><td>70.7</td></tr> <tr><td>全国</td><td>71.3</td></tr> </table>	地域	正答率 (%)	成田市	73.2	千葉県	70.7	全国	71.3	<p>道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる。(「変化と関係」)</p> <table border="1"> <tr><th>地域</th><th>正答率 (%)</th></tr> <tr><td>成田市</td><td>25.7</td></tr> <tr><td>千葉県</td><td>31.0</td></tr> <tr><td>全国</td><td>31.0</td></tr> </table>	地域	正答率 (%)	成田市	25.7	千葉県	31.0	全国	31.0
地域	正答率 (%)																
成田市	73.2																
千葉県	70.7																
全国	71.3																
地域	正答率 (%)																
成田市	25.7																
千葉県	31.0																
全国	31.0																
<p>図形問題に対しては、図形を構成する要素やそれらの位置関係に着目し、図形の構成の仕方や図形の性質について考察することができた。それに対し、球の直径の長さや立方体の一辺の長さの関係性を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことに課題が見られた。「変化と関係」では、異種の2つの量の割合として捉えられる数量の関係に着目し、目的に応じて大きさを比べたり表現したりすることができなかつた。日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち筋道を立てて説明することができるようにすることが大切である。</p>																	

## (2) 児童質問の全国・経年比較 (小学校)

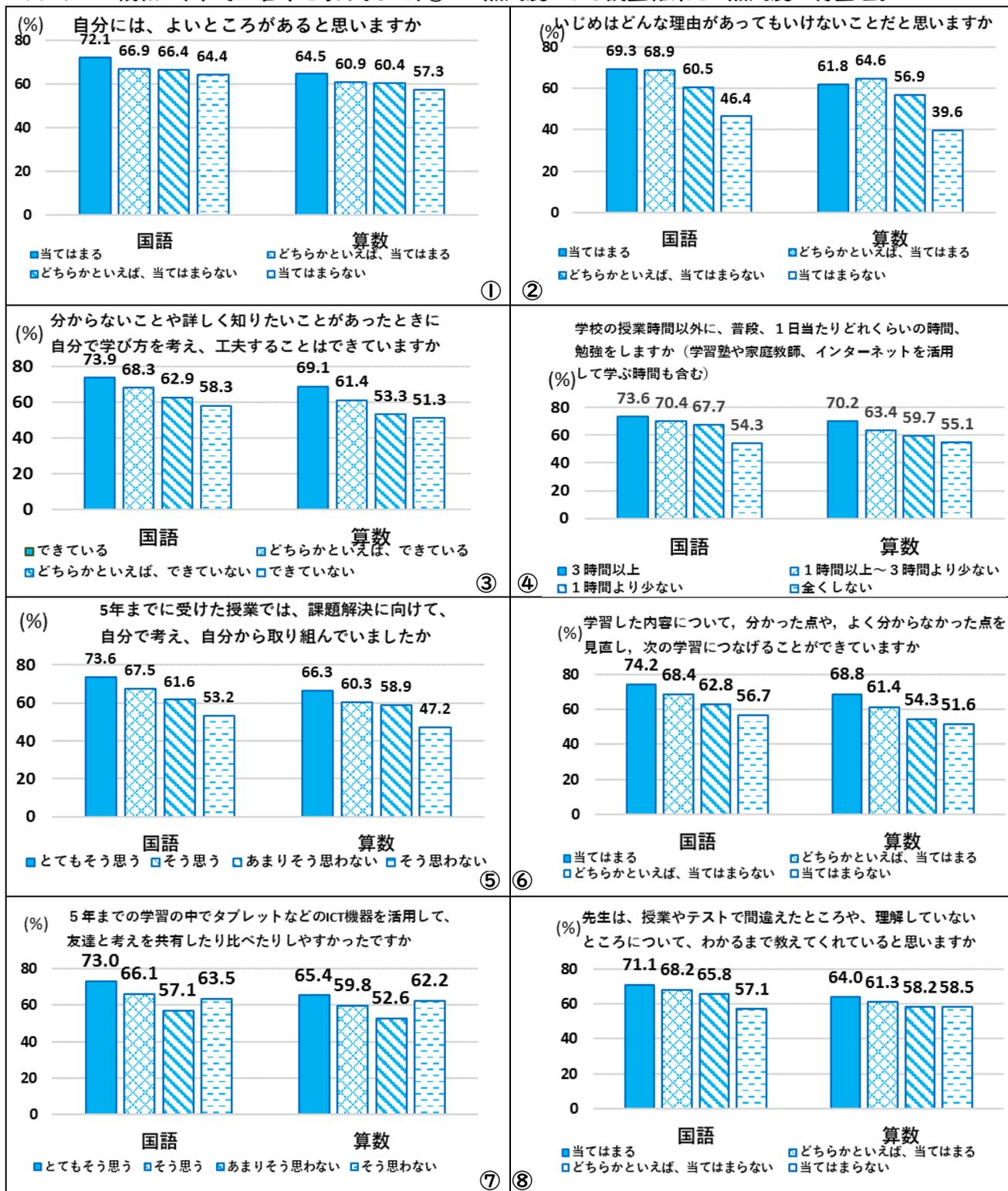
※⑤⑥以外、回答は「当てはまる、どちらかと言えば当てはまる」を合算した値



- ①②国語が「好きかどうか」や「授業がわかるかどうか」の質問に関して、全国平均より上回っているものの、昨年度よりも下降傾向にあるため、国語への興味・関心を高めながら「わかる授業」の展開を目指したい。
- ③④算数の「授業がわかるかどうか」の質問に関して、上昇傾向にあるものの、「好きかどうか」についての質問では全国平均より下回った。「問題が解けると楽しい」という気持ちにつながるような達成感や成就感を実感できる授業やふり返りを工夫したい。
- ⑤⑥国語や算数の「書く問題」では、最後まで解答を書こうと粘り強く取り組んだ児童の割合が全国平均よりも下回り、さらに昨年度から下降傾向にあるため、どの教科でより明確な目的意識をもたせ、見通しをもって課題に取り組めるような導入を工夫する必要がある。
- ⑦⑧課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む児童の割合が年々増加しており、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業の工夫改善がなされていると考えられる。一方で、協力しながら課題解決に取り組む児童の割合は全国平均より若干下回るため、ペアやグループでの協働学習をより多く取り入れたい。
- ⑨⑩友達関係に満足している児童の割合が増加傾向にあるため、何かあったときに相談できるような信頼関係を築くだけでなく、先生や学校にいる大人が児童の不安や悩みに気づき、積極的に声をかけていくことで、さらに学校生活を充実させることができると考える。

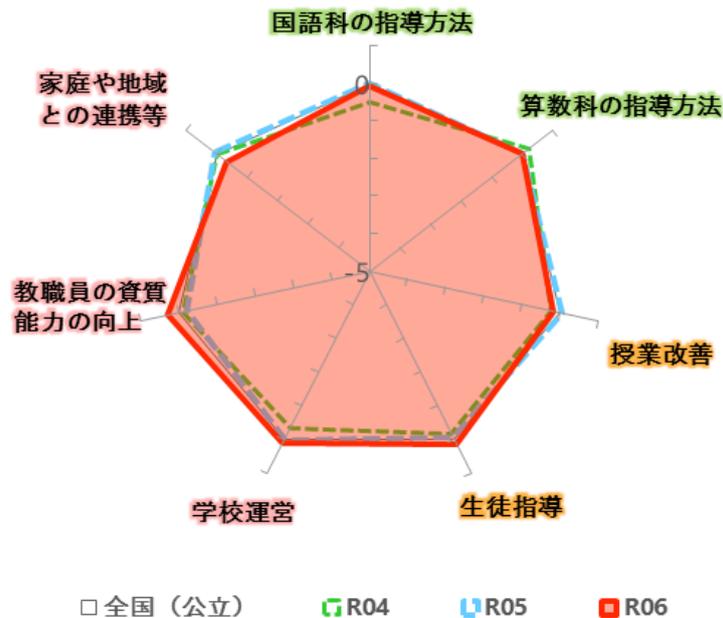
### (3) 児童質問と回答率とのクロス集計分析 (小学校)

※グラフの縦軸は、平均正答率を表す。また、④は6点尺度による調査結果を4点尺度に再整理。



- ①②自己肯定感や規範意識が高い児童ほど高い正答率が見られた。
- ③④普段から、授業以外の時間にも学習をしたり、自分で学び方を考え、工夫するような学習習慣が身に付いている児童ほど、高い正答率が見られた。
- ⑤⑥課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだり、分かった点や、よく分からなかった点を見直して次の学習につなげたりするなど、主体的に学び、ふり返りを大切にしている児童ほど、高い正答率が見られた。
- ⑦友達と考えを共有したり比べたりして ICT 機器を活用している児童は高い正答率が見られたが、特に算数では、「そう思わない」児童でも「そう思う」児童より高い正答率が得られていることから、具体的な使い方や協働学習については、調査研究を続けていく必要がある。
- ⑧間違いや理解が不十分なところについて、先生からわかるまで丁寧に指導されていると感じている児童ほど高い正答率が見られた。

(4) 学校運営における質問の全国平均との比較 (小学校) ※全国平均を0とする

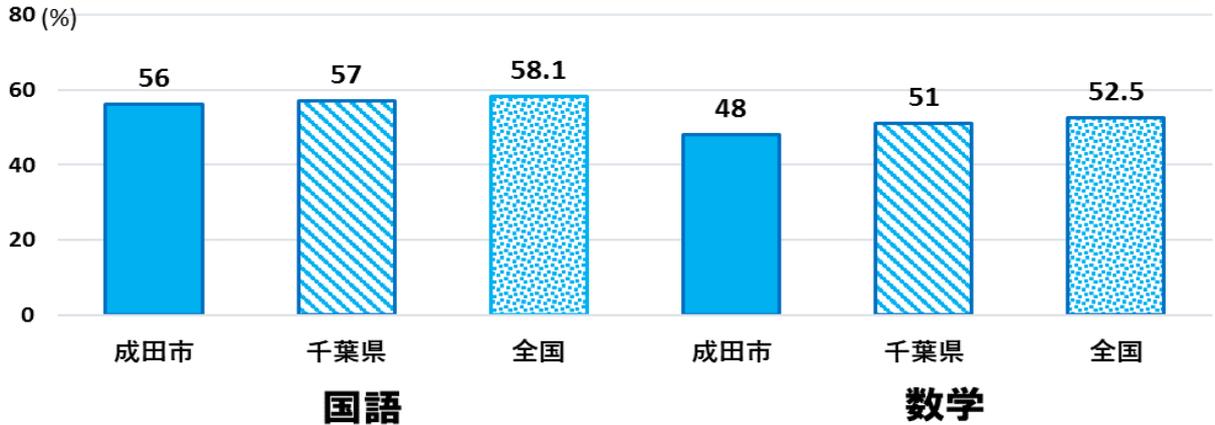


カテゴリー	成果
「生徒指導」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーによる教育相談に関して、児童が相談したいときに相談できる体制となっているか」について、「そう思う・どちらかといえばそう思う」と回答した学校は合わせて100%で、全国・県平均を上回った。</li> </ul>
「学校運営」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学校運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、改善に向けて学校として組織的に取り組んだか」「各児童の様子を、担任や副担任だけでなく、可能な限り多くの教職員で見取り、情報交換をしているか」「教職員が困っているとき、互いに相談できる雰囲気があると思うか」の質問に対し、「そう思う・どちらかといえばそう思う」と回答した学校は合わせて100%で、全国・県平均を上回った。</li> </ul>
「教職員の資質能力向上」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学校運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、改善に向けて学校として組織的に取り組んだか」「各児童の様子を、担任や副担任だけでなく、可能な限り多くの教職員で見取り、情報交換をしているか」「教職員が困っているとき、互いに相談できる雰囲気があると思うか」の質問に対し、「そう思う・どちらかといえばそう思う」と回答した学校は合わせて100%で、全国・県平均を上回った。</li> </ul>

カテゴリー	課題
「家庭や地域との連携等」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「職場見学を行っているか」の質問に、「行っている」と回答したは、全国・県平均を大きく下回った。これは、見学よりも学校に職業人を招聘し、体験や質問などのグループワークを通して、職業観を学ぶ形態が多いことによると考えられる。</li> </ul>
「授業改善」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思うか」について、「そう思う・どちらかといえばそう思う」と回答した学校は合わせて71.4%で、全国・県平均より下回り、課題である。</li> </ul>

# 3 中学校の調査結果

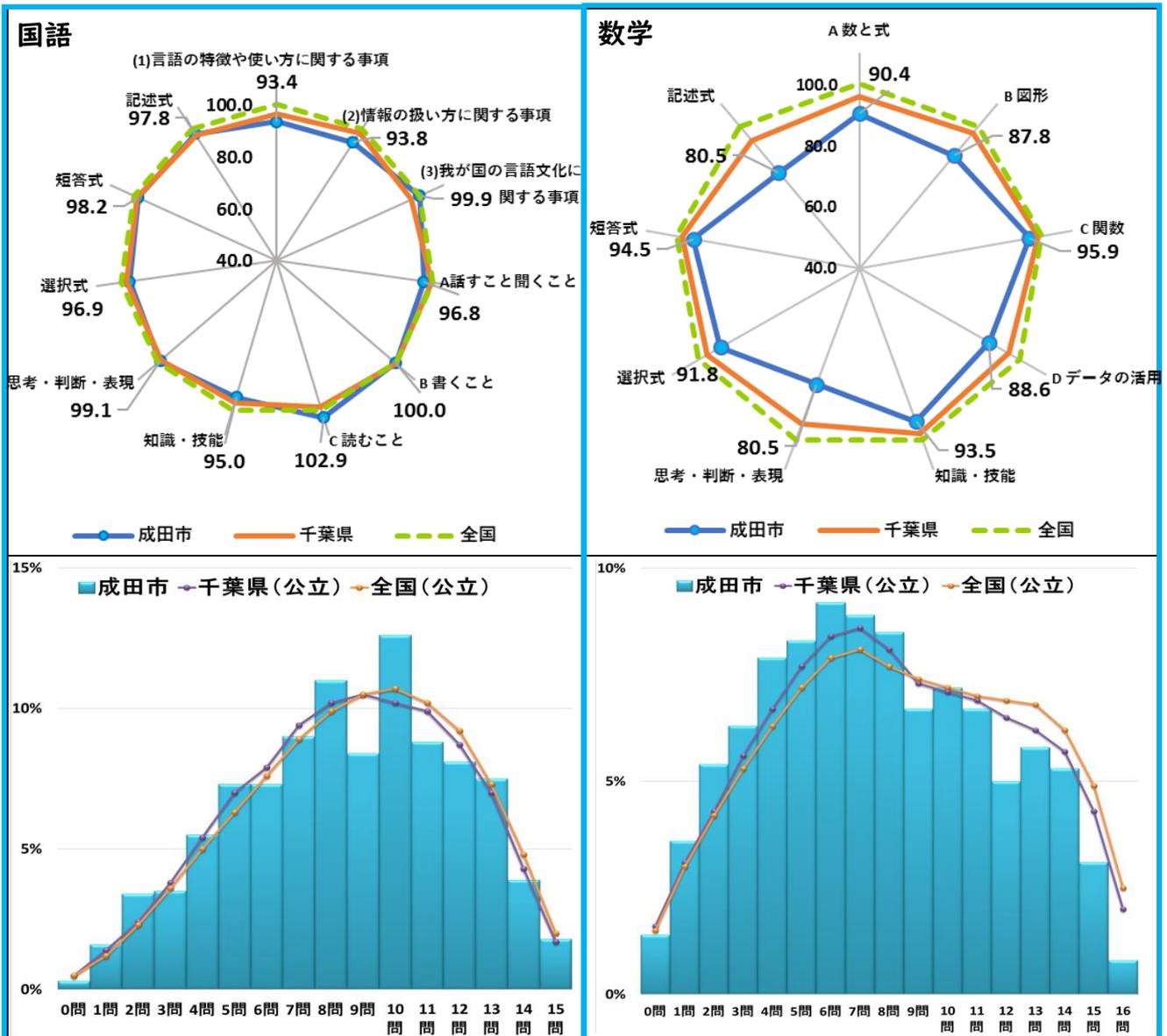
## (1) 教科に関する調査【全国・千葉県との比較】(平均正答率)



### 領域・回答種別比較

右列は正答数分布グラフ(横軸:正答数 縦軸:生徒の割合)

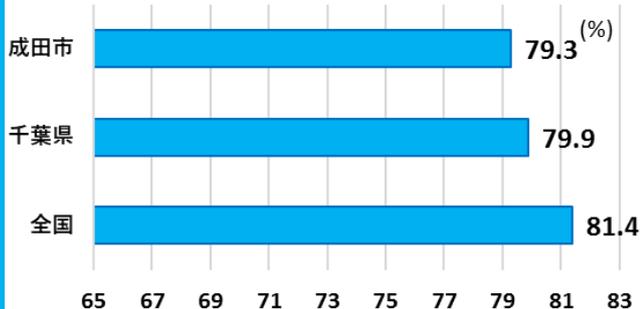
※レーダーチャートは全国平均正答率を100としたときの相対値を表す 英語は「話すこと」調査の結果を除く。



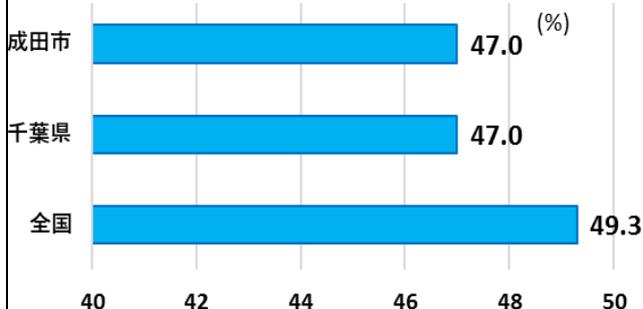
◆問題別傾向 正答率が高かった設問 低かった設問

国 語

目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。「書くこと」



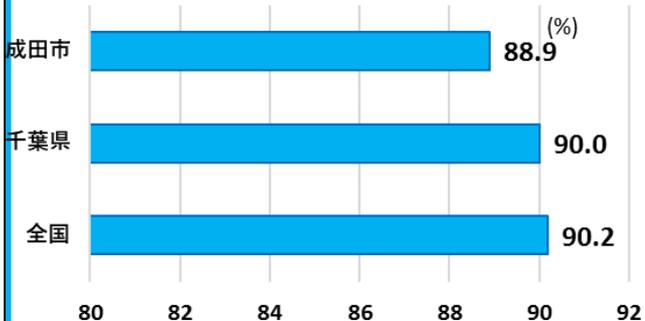
表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。「書くこと」



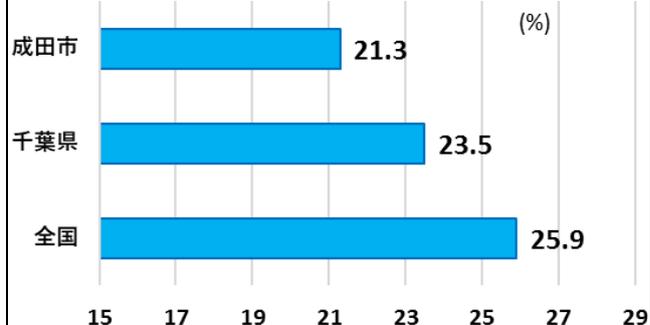
全体の7割の問題の正答率が全国・県平均を下回った。「書くこと」の領域では、物語を創作する場面において、構想をまとめたメモと物語の下書きをもとに、筆者が伝えたい意図を理解することができていた。その一方で、自分の考えが伝わる文章になるように工夫する際に、用いた語句や表現が、文章の内容を伝えたり印象付けたりする上で、どのような効果があるのかを確かめながら、記述することに課題が見られた。

数 学

問題場面における考察の対象を明確に捉え、正の数と負の数の加法の計算ができる。「数と式」



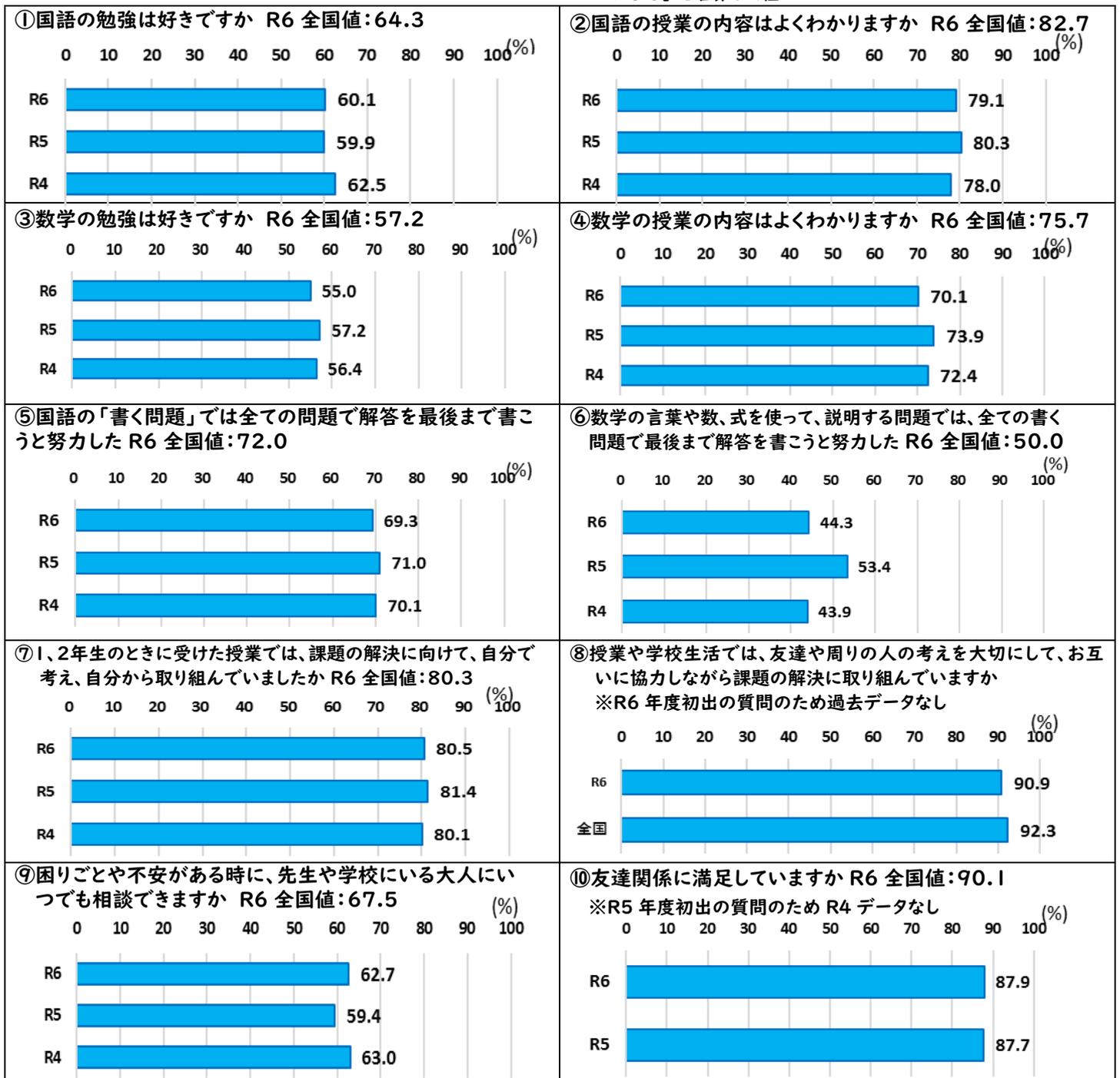
複数の集団のデータの分析の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる。「データの活用」



事象の特徴を的確に捉え、2つの整数の和を求める問題に関して、市の正答率は比較的高い結果が得られた。また「関数」では、日常的な事象における問題について、関数関係に着目し解決する等、知識・技能の理解を深めることができてきている。それに対し、「データの活用」では、箱ひげ図等、知識・技能として定着が必要な内容が身に付いていない傾向が見られる。また、複数のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに課題が見られた。2つ以上の集団のデータについて、その分布に着目し、その傾向を比較する活動を充実することが大切である。

## (2) 生徒質問の全国・経年比較 (中学校)

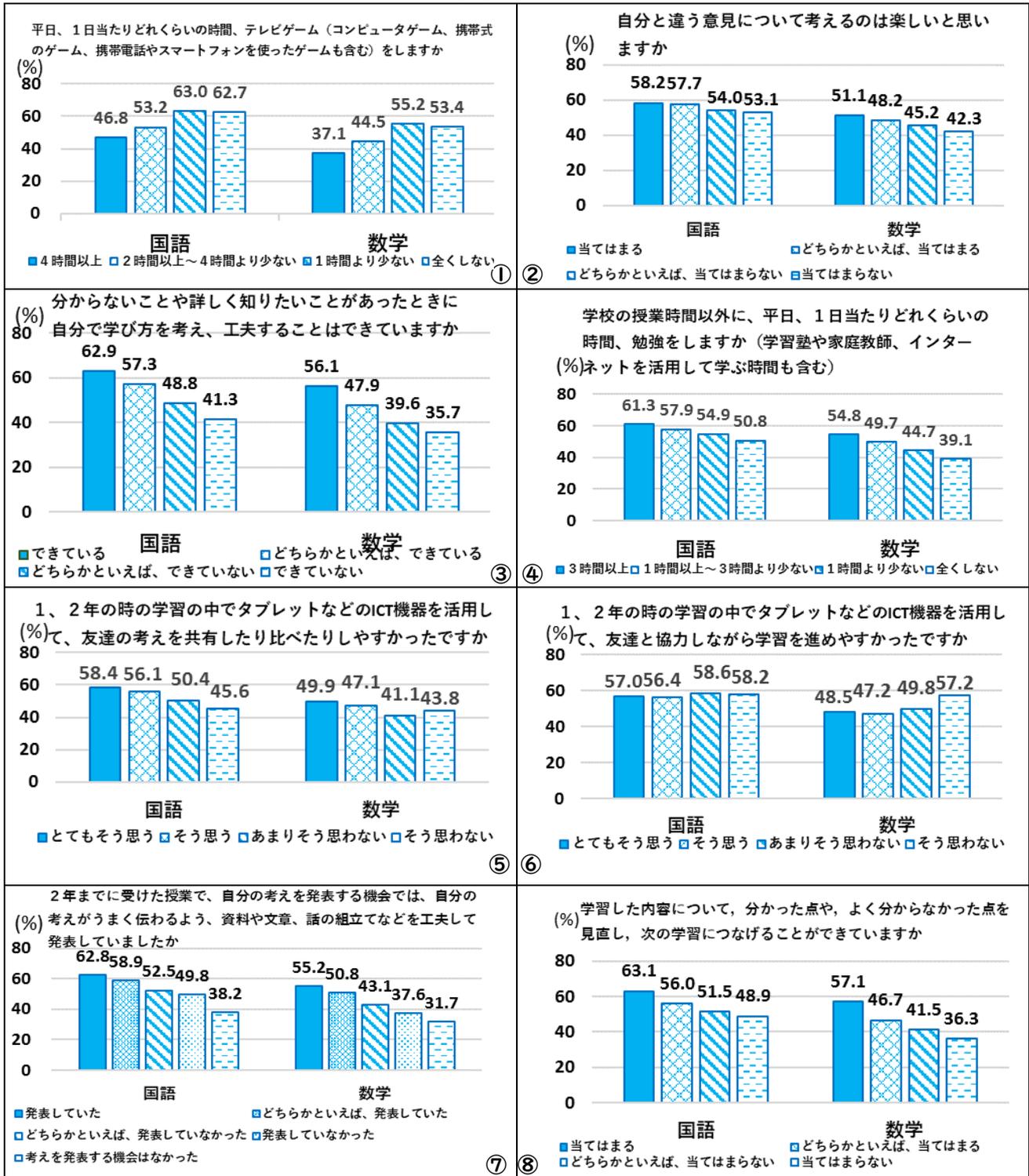
※⑤⑥以外、回答は「当てはまる、どちらかと言えば当てはまる」を合算した値



- ①②国語の勉強が好きだと感じている生徒は、昨年度と比較すると若干増えているが、授業がわかるかどうかの質問に関して昨年度よりも下降傾向にあるので、注意が必要である。
- ③④数学の勉強が好きかどうか、授業の内容がよくわかるかどうかの質問に関して、昨年度と比較して下降しているだけでなく、全国平均よりも下回っているため、指導の工夫改善が必要である。
- ⑤⑥国語や数学の「書く問題」について、最後まであきらめずに解答を書こうと努力した割合は全国平均と比較すると下回った。また、昨年度と比較しても下降傾向にあるため引き続き、見通しや目的意識をもって学習に取り組み、書く力を高めるための授業改善を推進したい。
- ⑦⑧課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む生徒の割合は全国と同程度であったが、友達と協力しながら課題解決に取り組む生徒は全国を下回る結果となった。
- ⑨⑩先生や学校にいる大人に相談したり、友達関係について満足している生徒の割合は、昨年度よりも増加傾向にあるものの、全国平均よりも下回っているため、先生や友達との信頼関係をさらに深めていくことに、普段と表情の違う生徒に気づき、積極的に声をかけたり、見守ったりするなど、一人一人寄り添えるようにしていくことが大切である。

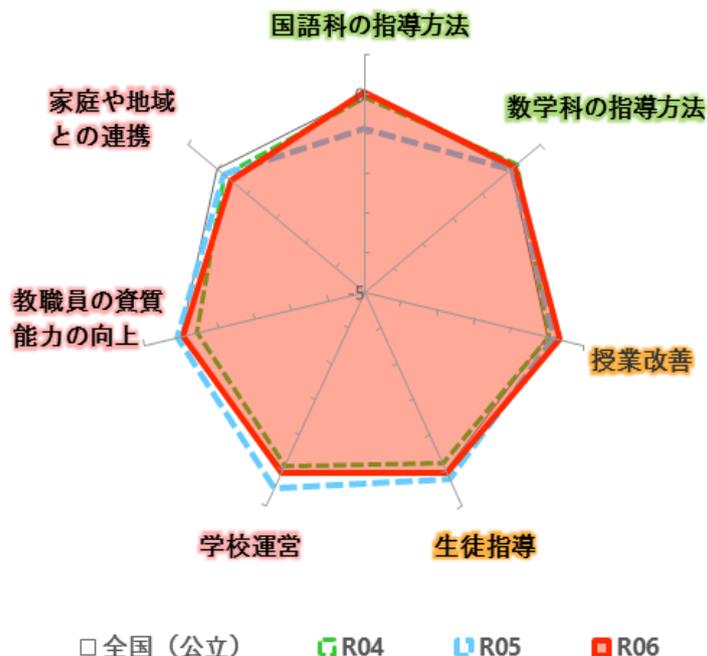
### (3) 生徒質問と回答率とのクロス集計分析(中学校)

※グラフの縦軸は、平均正答率を表す。また、①④は6点尺度による調査結果を4点尺度に再整理。



- ① 1日のゲーム時間が1時間より少ない生徒ほど、高い正答率が見られた。
- ② 自分と違う意見への好奇心や共感力が高い生徒ほど、学力に結びついている。
- ③④ 普段から、授業以外の時間でも学習をしたり、自分で学び方を考え、工夫するような学習習慣が身に付いている生徒ほど、高い正答率が見られた。
- ⑤⑥ ICT機器を友達の考えを共有したり比べたりする学習で活用している生徒ほど高い正答率が得られているものの、友達のと協同学習において、特に数学で「そう思わない」と回答している生徒ほど高い正答率が見られたため、具体的な使い方や協働学習について、より深い調査が必要であると考えられる。
- ⑦ 自分の考えがうまく伝わるように、発表の資料や話の組み立てなど、表現方法を工夫している生徒ほど、高い正答率が見られた。特に国語では学習効果を高める要素として重要であると考えられる。
- ⑧ 学習した内容について分かった点や、よく分からなかった点を見直して自分の学習についてふり返りを大切にすることが、理解度につながっていると考えられる。

(4) 学校運営における質問の全国平均との比較(中学校) ※全国平均を0とする



カテゴリー	成果
「授業改善」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、授業において、生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしたか」について「よく行った、どちらかといえば行った」と回答した学校は合わせて100%となり、全国・県平均を上回った。</li> <li>・「調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、授業において、生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学種活動を取り入れたか」について、「よく行った、どちらかといえば行った」と回答した学校は合わせて90%となり、全国・県平均を上回った。</li> </ul>
「学校運営」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「指導計画の作成に当たっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列しているか」について、「よくしている、どちらかといえば、している」と回答した学校は合わせて100%となり、全国・県平均を上回った。</li> </ul>
「数学科の指導法」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「調査対象学年の生徒に対する数学の授業において、前年度までに、問題の答えを求めさせるだけでなく、どのように考え、その答えになったのかなどについて、生徒に筋道を立てて説明させるような授業を行ったか」について、「よく行った、どちらかといえば行った」と回答した学校は合わせて100%となり、全国・県平均を上回った。</li> </ul>

カテゴリー	課題
「家庭や地域との連携等」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「調査対象学年の生徒に対して、前年度に、職場体験活動を何日程度行ったか」の質問に対して、「実施しなかった50%」「1～2日50%」であった。実施しなかった学校は、小学校同様、学校に職業人を招聘したキャリア教育を行っている学校が多いことが考えられる。</li> </ul>
「数学科の指導法」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「調査対象学年の生徒に対する数学の授業において、前年度までに、生徒がどのようなことにつまずくのかを想定した指導を行ったか」について、「よく行った、どちらかといえば行った」と回答した学校は合わせて90%となり、全国・県平均を5～6ポイント下回った。</li> </ul>